

# 特別史跡姫路城跡

—姫路城跡第358次発掘調査報告書—

2020

姫路市教育委員会

## 序

姫路は播磨の中心に位置し、古代より大国として独自の政治、経済、文化が栄えてきました。市域には瓢塚古墳や壇場山古墳など県内有数の古墳や播磨国分寺跡のように国の史跡に指定された重要遺跡が存在します。江戸時代の初めには、西国將軍池田輝政によって現在みられる姫路城の五層七重の天守と城下町が築かれ、その後400年の歴史を刻んでまいりました。

平成27年12月に上山里曲輪東側の通路において側面の石積みからの落石が確認されました。姫路市教育委員会では通路の復旧整備を行うにあたり資料を得るため、発掘調査を行っております。本書では、発掘調査の経過と概要について報告いたします。

最後に、事業の実施に当たり、貴重な御指導と御助言を賜りました文化庁、兵庫県教育委員会ほか関係の皆様方に心からお礼申し上げます。

令和2年(2020年)3月31日  
姫路市教育委員会  
教育長 松田 克彦

## 例言・凡例

1. 本書は兵庫県姫路市本町68番地に所在する特別史跡姫路城跡において実施した姫路城跡第358次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成28年度に実施し、平成29～31年度に調査成果の整理を行った。
3. 発掘調査は姫路市観光交流局 姫路城総合管理室 姫路城管理事務所の依頼をうけて姫路市教育委員会が実施した。現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが行い、発掘調査と報告書作成の一部作業について姫路市教育委員会生涯学習部城郭研究室の協力を得た。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用し、方位は一部の引用図を除いて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を使用している。
5. 土層注記に用いた色調は『新版標準土色帖』（1997年後期版）に準拠している。
6. 参考文献は第Ⅲ章の文末に一括し、引用はそれに付した文献番号を掲示した。
7. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は、姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
8. 発掘調査作業は「特別史跡姫路城跡上山里曲輪東通路確認調査工事」として臨海建設工業株式会社を請負者に実施した。石垣および周辺地形のレーザ計測作業は「特別史跡姫路城跡上山里レーザ計測業務委託」として株式会社バスコに委託して実施している。
9. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々のご協力を賜った。（敬称略、五十音順）  
北垣聰一郎、工藤茂博、高瀬要一、田中哲雄、西形達明、福田剛史

## 現地調査から整理作業までの体制

### 姫路市教育委員会

|           |                            |
|-----------|----------------------------|
| 教育長       | 中杉隆夫（～平成30年3月31日）          |
|           | 松田克彦（平成30年4月1日～）           |
| 教育次長      | 八木 優（～平成29年3月31日）          |
|           | 名村哲哉（平成29年4月1日～平成31年3月31日） |
|           | 坂田基秀（平成31年4月1日～）           |
| 生涯学習部 部長  | 植原正則（～平成29年3月31日）          |
|           | 岡田俊勝（平成29年4月1日～平成31年3月31日） |
|           | 沖塙宏明（平成31年4月1日～）           |
| 文化財課 課長   | 花幡和宏                       |
|           | 課長補佐 大谷輝彦                  |
| 埋蔵文化財館長   | 前田光則                       |
| センター 課長補佐 | 岡崎政俊                       |
| 係長        | 森 恒裕                       |
| 技術主任      | 小柴治子                       |
| 城郭研究室 室長  | 村田和宏（～平成29年3月31日）          |
|           | 植原正則（平成29年4月1日～）           |
| 課長補佐      | 工藤茂博（～平成29年3月1日 係長）        |
| 係長        | 多田暢久                       |

## 目次

序

例言・凡例

現地調査から整理作業までの体制

目次

|                  |    |
|------------------|----|
| 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過   | 1  |
| 第1節 調査に至る経緯と経過   | 1  |
| 第2節 調査地の位置と歴史的環境 | 1  |
| 第Ⅱ章 調査の成果        | 4  |
| 第1節 検出遺構         | 4  |
| 第2節 出土遺物         | 12 |
| 第Ⅲ章 総括           | 16 |
| 参考文献             | 18 |
| 写真図版             | 19 |
| 報告書抄録・奥付         |    |

## 図目次

- 図1 調査地位置図
- 図2 調査地現況図
- 図3 「池田家姫路城内侍屋敷図」
- 図4 「諸番所色分之図」
- 図5 「姫路侍屋敷図」
- 図6 調査区配置図
- 図7 調査区平面図、調査写真
- 図8 1・2区土層断面図、調査写真
- 図9 3区平・断面図、調査写真
- 図10 4区平・断面図、調査写真
- 図11 5区平・断面図、調査写真
- 図12 出土遺物(1)
- 図13 出土遺物(2)
- 図14 出土遺物(3)
- 図15 堅石垣(登)石垣・堅堀比較図

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯と経過

平成27年12月22日、特別史跡姫路城跡内曲輪の上山里曲輪東側に位置する三の丸広場から喜齋門へと通じる通路法面の側面石積で落石が確認された(写真1)。関係機関と協議の結果、通路の復旧整備の方針について検討資料を得るために確認調査を行うこととなり、平成28年4月22日付27受庁財第4号の2204で文化庁長官の現状変更許可を受けた。

発掘調査は姫路市埋蔵文化財センターが担当し、「特別史跡姫路城跡上山里曲輪東通路確認調査工事」として平成28年6月30日から同年11月6日の工期で実施している。現地作業は平成28年7月26日着手し同年10月18日に終了した。平成29年6月27日に現状変更の終了報告を提出している。調査成果の整理後に本報告書の刊行をもって事業を完了した。調査で検出された石垣については、姫路市立城郭研究室が「特別史跡姫路城跡内船場蔵南石垣保存修理工事」として平成28年度に修理工事を実施している。

### 第2節 調査地の位置と歴史的環境

中世から続く姫路城は、慶長六年(1601年)に池田輝政により改修を受け、現在の姿がほぼ完成した。姫山と鷺山という標高50m前後的小丘陵を利用した平山城である。城下町を開む外堀以内を外曲輪、中曲輪、内曲輪に区分する。内曲輪は姫山と鷺山の上が本丸や二の丸となり、山麓は南側を大手門から天守に通じる三の丸、東側を喜齋門からとの門へと続く搦手とし、その周囲を内堀が取り巻く(図1)。

三の丸と搦手との間は、内堀から北西方向へ分岐した水堀が姫山の裾まで延びて区画される(写真3)。江戸時代の絵図によれば、堀の両側は土塀を設けた石垣となり、堀は上山里曲輪下の姫山斜面へ突き当たって収束する。さらに石垣上の土塀は斜面の途中で柵に変化して上山里曲輪石垣まで続く(図3～5)。このように、江戸時代は堀の南北を連絡する通路はなく、三の丸と搦手方面との連絡は遮断されていた。

近代に入り姫路城内が陸軍省の所管となると、大天守などを除き、三の丸や搦手などにある多くの建物が除却された。絵図に描かれた石垣上の土塀もこの頃に撤去されたとみられる。

大正元年には城の一部が姫路市に貸下され、「姫山公園」として大天守周囲の一般公開が始まった。昭和3年の史蹟指定後には三の丸なども公園に編入され、昭和7年に三の丸側の菱の門を入口として整備されると、見学者の利便性向上のため、昭和8年にこの区画堀の際に三の丸と搦手方面を結ぶ通路が設けられている(写真2、文07)。その後、昭和32年に通路幅が拡張され現状の姿となった。



写真1 通路側面石積の毀損状況



写真2 旧通路と昭和8年の開通記念碑

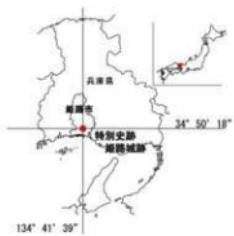
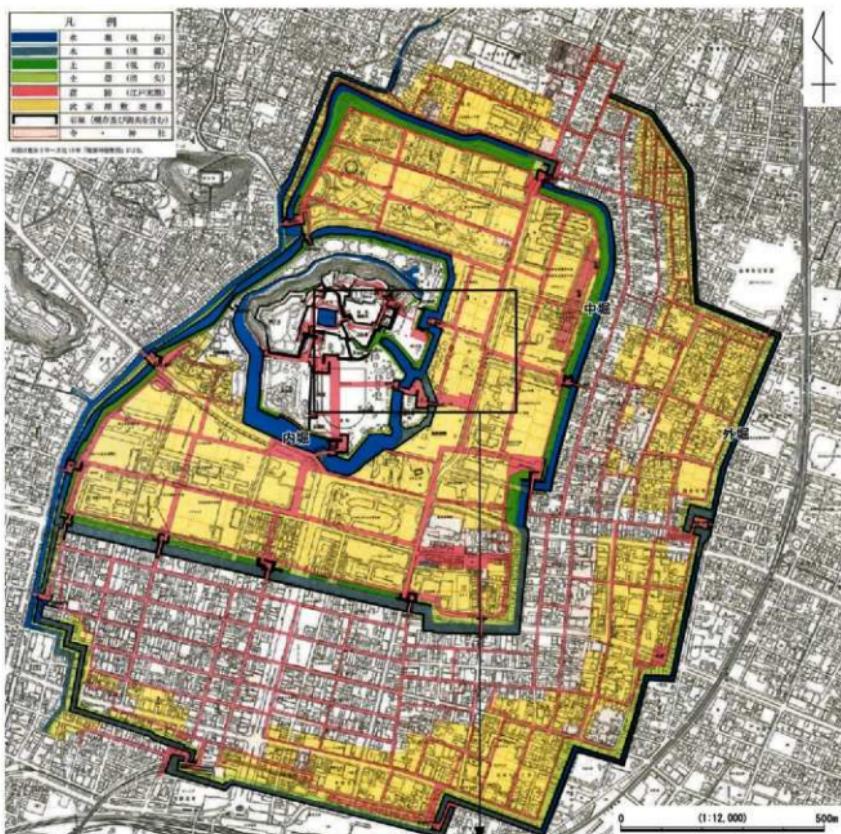


図1 調査地位置図

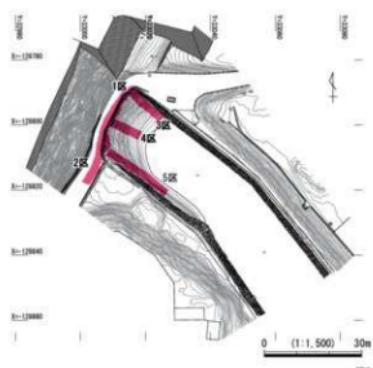


図2

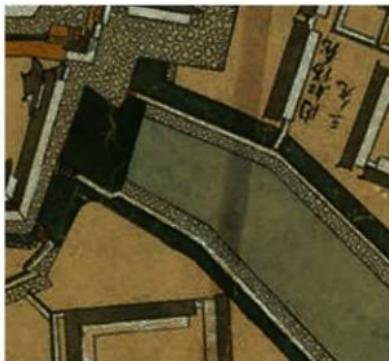


図5

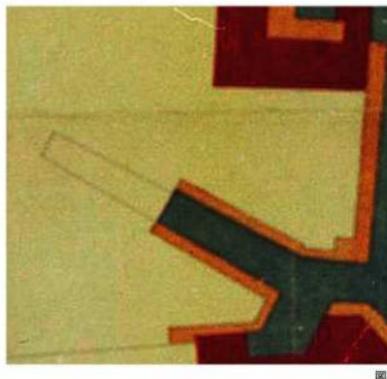


図3

図2 調査地現況図

図3 『池田家姫路城内侍屋敷図』

〔岡山大学附属図書館所蔵図写・姫路市立城郭研究室所蔵〕

17世紀初頭・池田家時代

池田家時代に区画堀がすでに存在した。

図4 『諸藩所色分之図』〔姫路市立城郭研究室所蔵〕

18世紀初頭・2次柳原家時代

戦時には番所を設置する計画があった。

図5 『姫路侍屋敷図』〔姫路市立城郭研究室所蔵〕

18世紀中葉・酒井家時代

上山里東側斜面への堅土壁と堀が確認できる。

写真3 内曲輪に区画する内堀（南東から）



図4



写真3

## 第Ⅱ章 調査の成果

### 第1節 検出遺構

調査は5区に分けて実施した(図6・7)。堀の両側の土塙推定線と直交するように現状の南北通路内に延長35mのトレンチを設定し、北側は1区、南側を2区とした。通路から下の堀までの斜面には、通路と直交する3本のトレンチを設定し、北から順に3・4・5区と呼称した。

**1・2区** 当初、1・2区は現通路全面を対象としたが、通路に沿って中央に電気ケーブルが埋設されており、それより山側の西半では通路舗装の直下で姫山岩盤が検出された。近代の通路設定時に地山まで削平を受けたものとみられる。このため、通路東半の幅2mを調査区として発掘を行った。

1区はケーブル埋設による攪乱と近代の通路盛土が姫山岩盤の直上まで及んでいた。北側の石垣上から続く土塙の存在が推定された調査区の北端についても、石垣上端が削平されており、土塙基礎などの遺構は検出されなかった。

2区も全体として近代以降の通路盛土となるが、調査区西壁沿いにおいて現状通路盛土より下の土層を確認することができた(図8)。それによると、通路舗装の下には姫山岩盤の風化により生じたと推定される厚さ1m以上の角礫を主体とする堆積があり、その下で一部姫山の岩盤が検出されている。その角礫層は、遺物を含まず北側から南側へ下がりながら続くことから、人為的なものではなく、築城以前の姫山の自然堆積とみられる。

2区の壁面に幅3m、深さ1.7mの溝状の遺構断面がみられた(図8)。この遺構から西の山側斜面には、断面に対応する場所に堅方向の溝状の落ち込みが現状でも確認され、一連のものとみられる。溝は角礫の堆積層だけでなく、一部岩盤まで削り込んでいることから、自然崩落によるものではなく人工的な堅堀の可能性が高い。調査区東側の大半は近代の通路盛土となり堅堀状遺構の検出は一旦途切れるが、平面の調査でその下側への続きが検出されており、さらに堀に向かって下っていたと考えられる。この堅堀状遺構の埋土は多数の瓦片と一部焼土の混じる礫・粗砂土であり、その一部は戦災焼土の可能性もあることから、最終的に埋没したのは戦後に通路が拡幅された段階まで下ると思われる。

確認された堅堀状遺構は、堀の南側石垣から西側の斜面へと延長する土塙推定線の北側に並行することから、北側の掲手側から三の丸への侵入を遮断する機能が推定される。ただ、土塙については、近代の通路設置時に掘削を受けたものか、基礎などの遺構は検出されなかった。なお、1区の西側斜面にも堅堀状の落ち込みがみられるが、調査区内の対応する個所は攪乱を受けており、遺構の続きは確認できなかった。



写真4 調査地全景 (南東から)



写真5 調査地全景 (北から)

**3区** 幅2m、延長12.5mで堀の北側石垣に沿って北西から南東方向に設定した(図9)。基本的な層序は上から瓦片などを含む近代以降の堆積土、岩盤が風化した角礫の堆積層となる。角礫層は3区西端で確認され、堀の北側石垣の根石はこの礫層の上面に据えられていた(図9写真b)。

調査区西側では、礫層下に40～50°の急傾斜で姫山岩盤の存在が推定された。一方、東側では近世以降の瓦片を含む層が1.5～2m以上続くことから、江戸時代には調査区の東側3/4まで水堀が及んでいた可能性が高い。

**4区** 幅2m、延長10mで北側と南側石垣の中間に、斜面に沿って北西から南西方向に設定した(図10)。

基本的な層序は、3区と同じく上から瓦片などを含む近世・近代の堆積土、岩盤の風化礫の堆積層、一部で姫山岩盤となる。城郭に伴う遺構は確認されていない。

現地表の傾斜は裾広がりになりながら20°～40°であるが、推定される岩盤の傾斜は40°であることから、3区と同じく築城時において裾部は現状より急傾斜となり、調査区の東側1/3まで水堀が及んでいたとみられる。

**5区** 幅2m、延長21mで堀の南側石垣に沿って北西から南東方向に設定した(図11)。南側の石垣には堀沿いに約1.9m幅で石垣裾を高さ約2m覆う盛土が25m続く(図11写真b)。取り壊された石垣上土塙の堆積の可能性も考えられたが、近世瓦の小片が少量含まれていたものの、盛土内には漆喰や大型瓦片など土塙の痕跡を示す遺物は見られず、土塙が撤去されて以降に堆積したものと考えられる。ただ、盛土が覆っていた石垣の間詰石の残存状況が地上に露出していた個所よりも良好なので、この堆積は廃城からさほど下らない時期のものであろう。

調査区西側は石垣前面に2.5m以上の堆積があり、石垣根石まで到達できなかった。土層中には近世以降の瓦片が多く含まれ、近代の通路設置時などに埋められたとみられる。

3区・5区とも隣接する石垣のうち発掘により検出された所では、地上に出ていた個所よりも円礫(河原石)を主体とする間詰石の状況を良好に確認することができた(写真7・8)。



写真6 1区と新太鼓櫓石垣下姫山岩盤



写真7 3区石垣間詰換出状況



写真8 5区石垣間詰換出状況

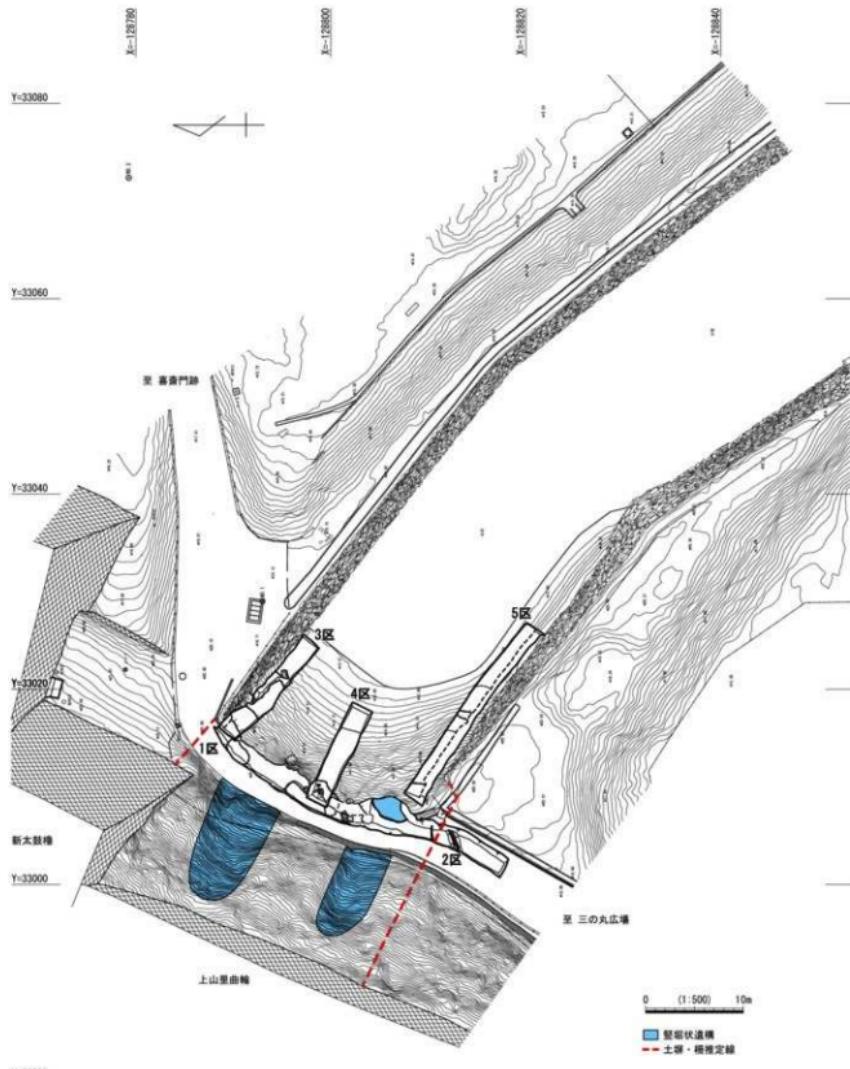


図6 調査区配置図

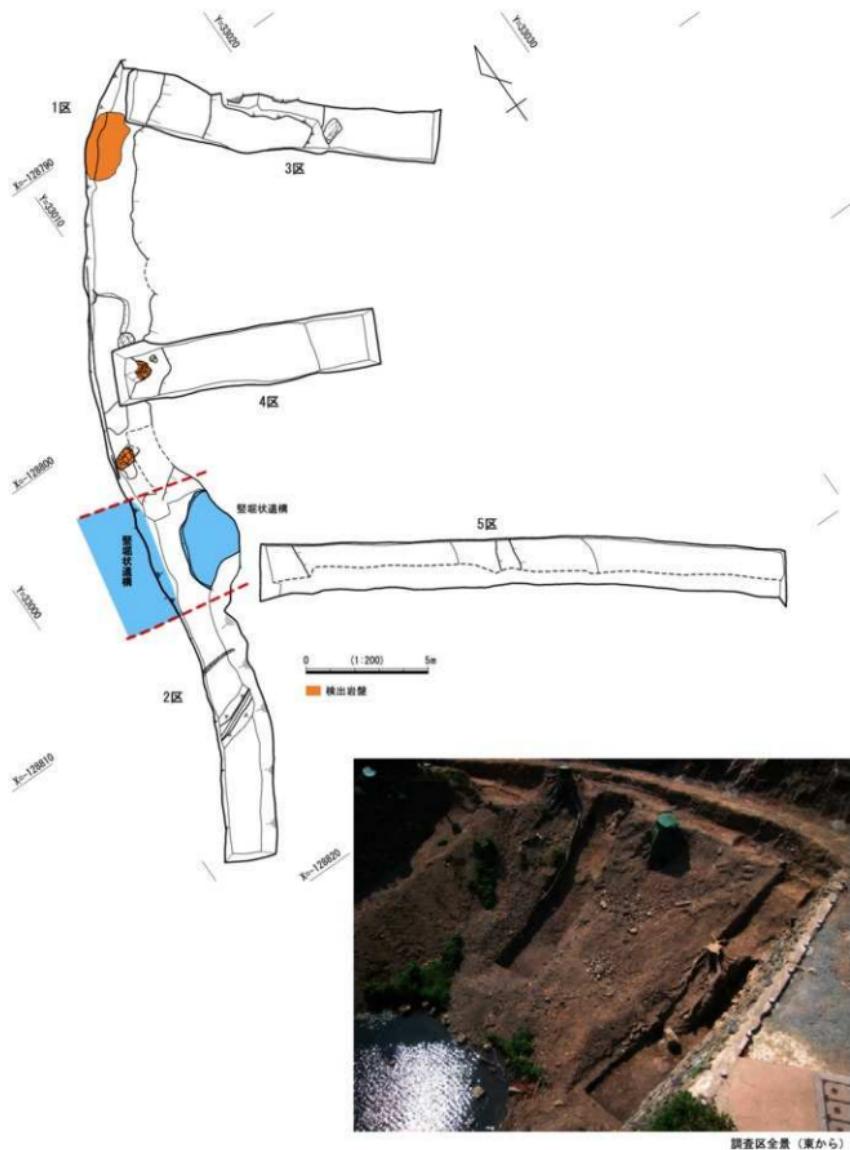


図7 調査区平面図、調査写真

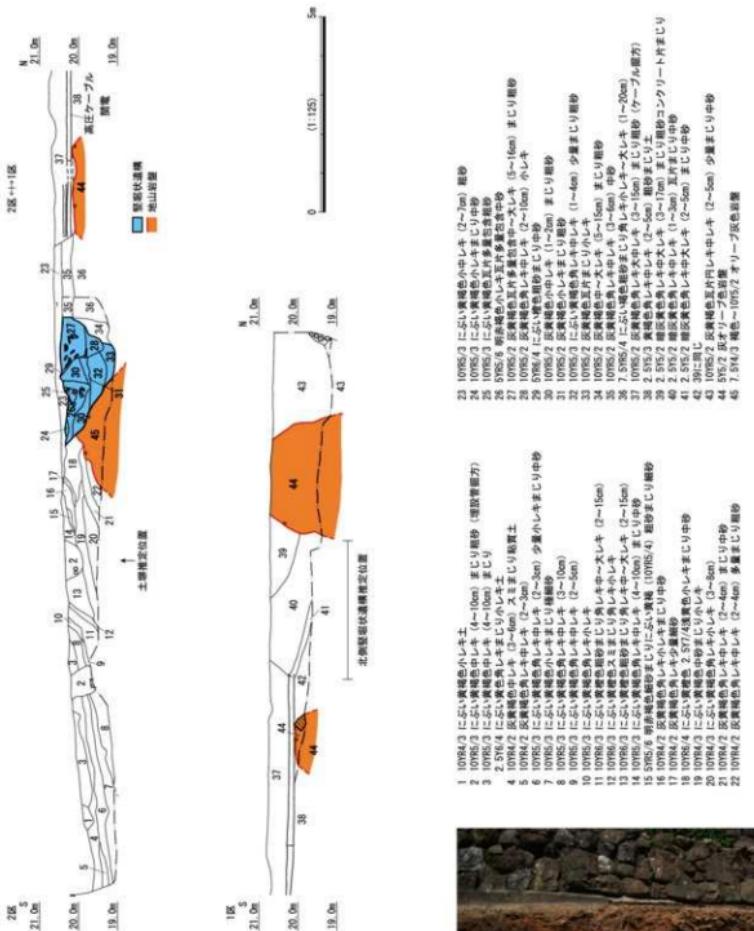


図8 1・2区土層断面図、調査写真

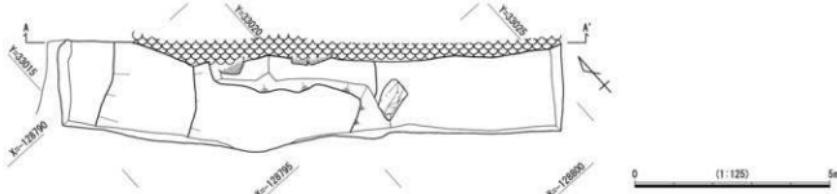
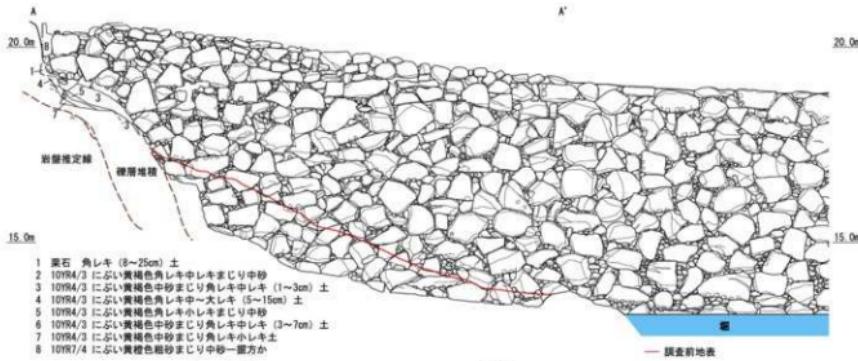


図9 3区平・断面図、調査写真

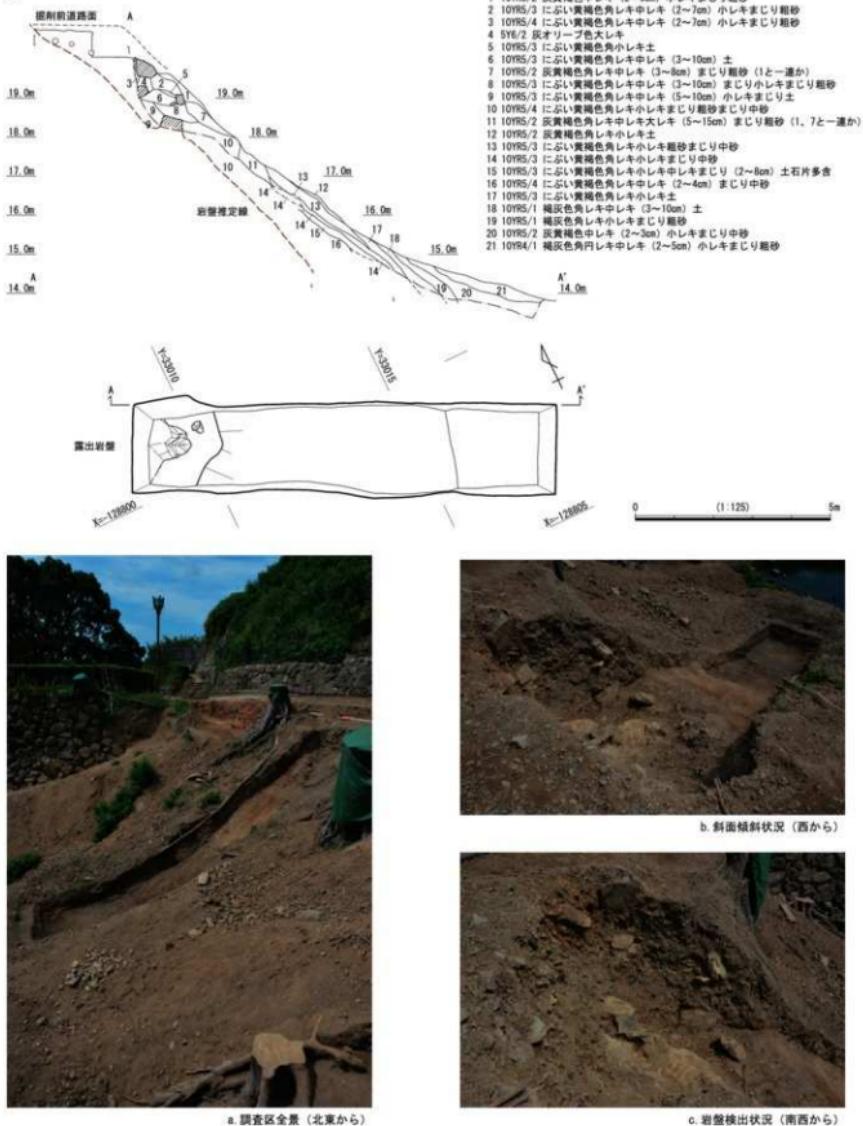


図10 4区平・断面図、調査写真

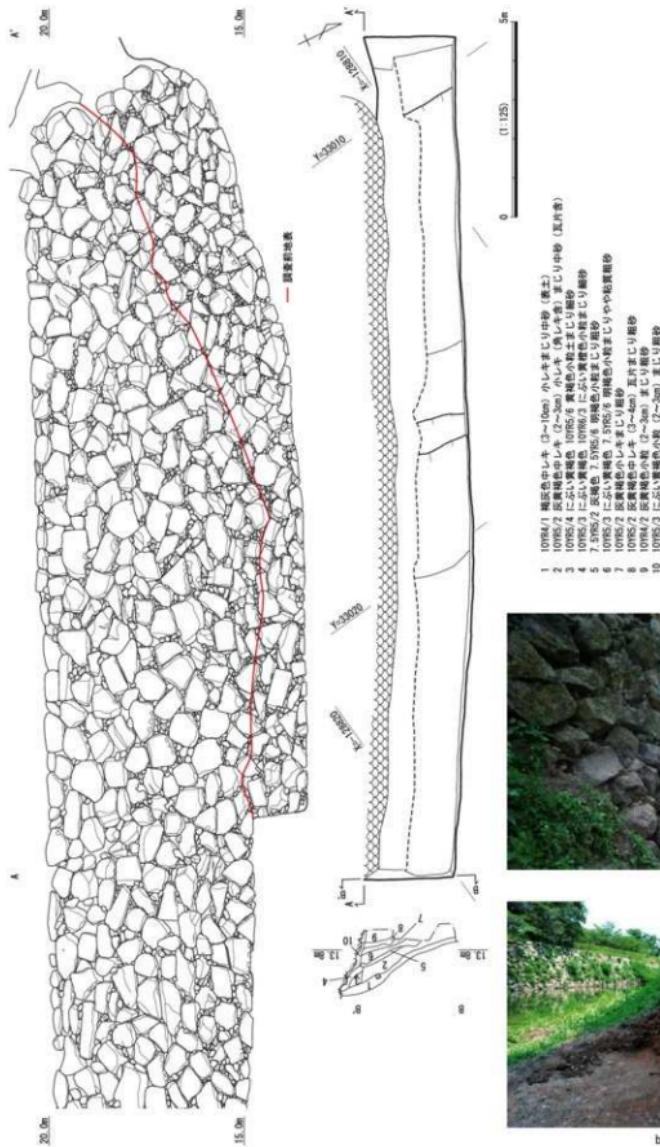


図11 5区平・断面図、調査写真

## 第2節 出土遺物

調査では陶磁器や瓦が出土したが、明確に遺構に伴うものは確認できない。近代以後の遺物も多く含まれており、主要なものの報告する(図12～14)。戦後に市街の戦災焼塗を当該地付近の造成に使用した可能性も指摘されることから、必ずしも付近で使用されたものとは限らないことに注意が必要である。

**軒丸瓦** 1は六葉の蓮華文軒丸瓦で、瓦當に木目が浮き出でおり範は長期にわたって使われていたものとみられる。城内では、帶の櫓瓦塚からの出土も報告されている(図12参考A、文03)。他に書写山円教寺に所蔵されているものはコビキAで16世紀後半のものとされる(文04)。ただ、文様はいわゆる播磨国衙系瓦と共通する特徴が伺え、近世姫路城以前の施設に関連するものであろう。

2は花弁紋の瓦当部で、続く丸瓦部の幅が通常の丸瓦より短く扁平なことから飾瓦とみられる。

家紋瓦は3の柳原氏の源氏車文の小片のはかは4～8の酒井氏の剣酢漿文であった。うち4は瓦当面の復元径が18.0cmある大型のもので、滴水瓦とみられ主要建物で使われていたものの混入であろう。その他の家紋瓦は瓦当面の径が、5が14.0cm、6が14.1cm、7が13.75cm、8が15.45cmと比較的揃うことから、調査区近くに存在した櫓や門などで標準的に使用されていたものとみられる。

また、9のような鳥文軒丸瓦の小片が1点出土した。この鳥紋は酒井家重臣の河合寸翁ゆかりのもので、中曲輪D地区で出土している。他に寸翁が設立した仁寿山校からの移築建築における使用が知られる。

10から20は三つ巴文の軒丸瓦で、10は尾が長く巴紋のみ。以下は周間に珠文を配す。11は珠文を三つ以上つなぐ突起の出た細線がある。巴文のほとんどは左巻きであるが、12のみは右巻きとなる。

瓦当面の径と珠文の数を見ると14.19.20が復元推定を含めて径平均が13.9cm、珠文11個と揃うので調査区近くでまとまって使われていたものであろう。15も径は14.1cmではなく等しいが、復元では珠文が12個となる。一方、12.17.18は復元も含めて珠文が13個となり、瓦当径も12が16.2cm、18が16.7cmとやや大型である。さらに、11は復元瓦当の径が17.5cmと大きい。

軒丸瓦は家紋瓦と巴文ともに出土している。絵図によれば堀の両岸石垣上は土塙であった。現在の城内の瓦の使用状況も参考に勘案すると、14.15.17.19.20などの巴文瓦は石垣上の土塙、家紋瓦は上山里曲輪などの周辺の門や櫓で使用されていたものから転落してきた可能性が考えられる。

**軒平瓦** 21は下向三葉の中心飾りを有する軒平瓦である。

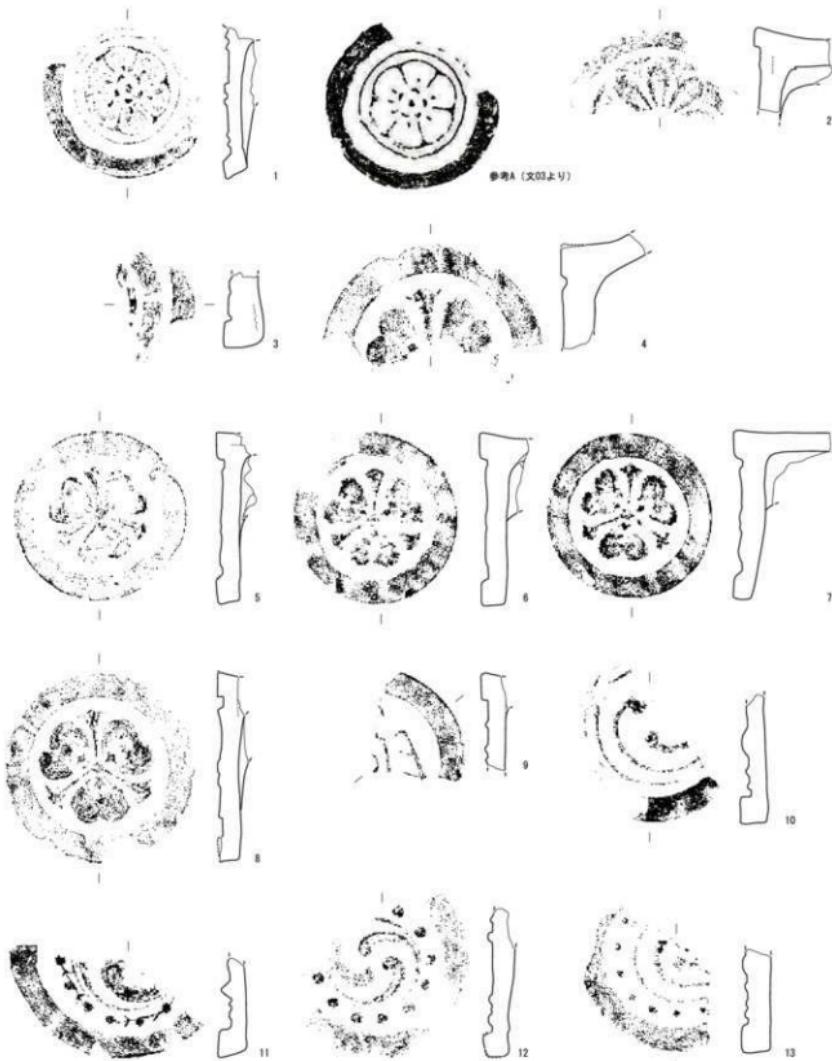
22は上向三葉の中心飾りの両脇に2回反転唐草文を配する。

23・24は同文で中心飾りに九弁をあしらう両脇に三つ葉を表現する。他に埋門跡の土橋東側中堀内の暗青灰色粘土質土(図13参考B、文10)や内京口門跡(文11)、城下町の立町からも出土している(文09)。

**陶磁器・その他** 25は径7.8cm・器高1.8cmの手づくねの土器皿である。

26は口径14.0cm・器高3.4cmで口縁部がやや外反する。内面全体に鯉、外面体部には水草紋を配する染付皿。底部中央を欠いており銘は不明であるが、江戸時代後期の東山焼とみられる。

27・28・29は近代において城内に陸軍が駐屯していた時期に使用された染付の碗と皿である。27の碗は内面底の中央に「歩十ノ三」と書かれた桜文を描き、外面体部に星文を入れる。28の碗も外面体部に星文があるが、27より小ぶりであり内面は無紋とみられる。29皿も27と同じく内面に桜文を描くが、中央の文字は「□十ノ二」とあり、底部の高台内にはNとYを組み合わせた記号と、その上部に半円形と下に直線でアルファベットを配列する刻印が確認できた。ただ、刻印は薄くアルファベットの判読はできなかった。ともに城内に駐屯した第10師団歩兵第10連隊で使用されたものと推定される。30は日清戦争まで陸軍の主力小銃であった口径11mm村田銃の薬莢。無刻印だがリム形状からより後出のものと思われる。



0 (1-4) 10cm

図12 出土遺物 (1)

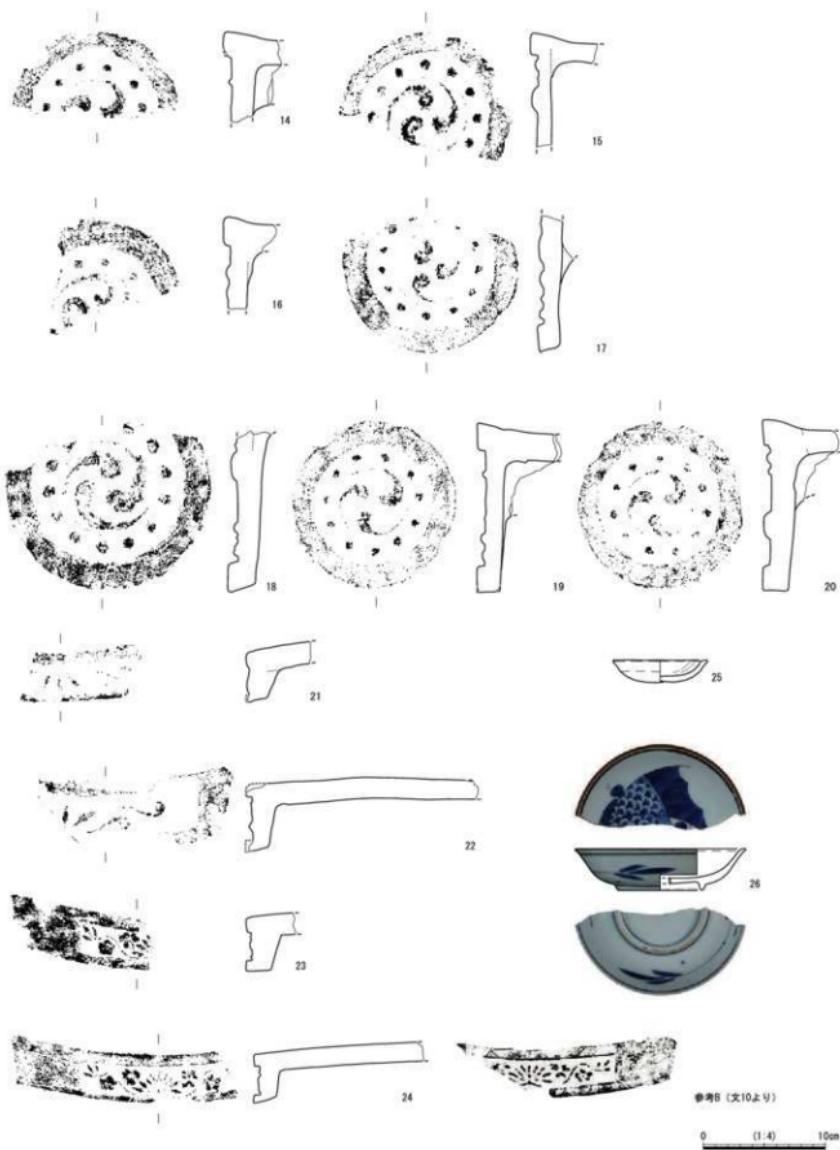


図13 出土遺物 (2)



27



29



28



0 (1:4) 10cm

図14 出土遺物 (3)



写真9 垂堀状遺構（東から）  
— 南側の垂堀状遺構範囲  
■ 土器・埴輪定位線



写真10 垂堀状遺構（北東から）

## 第Ⅲ章 総括

今回の調査により姫路城跡三の丸広場と搦手側を結ぶ南北通路について、中央に埋設管が入り、そこから西側は姫山斜面の岩盤を削平、東側は通路設置時の近代盛土で造成していたことが確認できた。江戸時代の絵図に描かれた堀両側の石垣から続く土塁とその基礎は1区・2区では検出できなかったが、これは、通路設置時の削平により失われたためとみられる。

通路より下の斜面については、姫山岩盤の上に岩盤が風化した礫が自然堆積したとみられる層があり、それが本来は40°近い急斜面で下り、堀がさらに上山里曲輪側へ延びていたことが確認された。現状で堀部が広がり堀沿いの傾斜が緩やかなのは、その大半が近代に入って通路造成などに伴い投棄された土砂が堆積したためと考えられる。

通路より上の上山里曲輪東側石垣までの斜面について、現状でも土塁・柵の推定位置と並行して2本の溝状の窪みが確認でき(写真9・10)、堅堀の可能性が推定されていた。今回、南側の溝については、2区で土層断面を確認することができた。溝は現地表で確認できるものよりも本来は深く、一部は岩盤まで削り込んでいた。自然の崩壊ではなく、堅堀として意識的に掘られたとみてよいであろう。もう一本の北側の溝状造構については、擾乱のため1区で断面を確認することはできなかったが、北側の石垣・土塁の推定位置と並行することから、南側と同じく堅堀であった可能性が高い。

その他、3区と4区では隣接する石垣の埋没部分が検出された。堀両側石垣は凝灰岩を主体とする打ち込みハギであり、現状では間詰石はみられるものの築石間は大きく開いた個所が多い。一方、埋没していた個所では円礫を密集させて詰めていた。城が機能していた段階における、間詰石の状況を推定する資料と評価できる。

姫路城内曲輪において天守へ至るルートは、南側の大手門(桜門・桐の門)から菱の門を経由する大手と、東側の喜斎門からとの一門を経る搦手の二つがある。内曲輪を開む内堀の東側から北西方向に分岐して上山里曲輪へ至る堀は、この二つを分離する。今回の調査により、築城当時は堀の終点が現状よりも姫山側に食い込んでいたことと、さらに続きの上山里曲輪東側の姫山斜面に土塁と堅堀状造構を設けていたことが確認できた。これは、二つのルートの往来を強固に遮断しようとする縄張りの指向を伺わせる。

これらの堀や堅堀状造構が設けられた時期を確定する資料は得られなかったが、城内部分は略図であるものの池田家時代の絵図(図3)にすでに堀が描かれていることや、堀の両側の石垣がⅡ期とみられることから、関ヶ原合戦後の池田家時代に築かれた可能性が高い。

山城や小丘陵上に築かれた平山城においては、山上と山麓の曲輪間に自然地形の斜面が残ることがあり、攻城側によるそこからの迂回や上下曲輪間の分断を防ぐため、堅石垣([登り石垣])と呼ばれる石塁などで上下の曲輪を連結する事例がみられる。

小規模に曲輪を結ぶ事例は土塁も含めると、羽柴秀吉が天正十一年(1583年)に築いた山崎城跡(京都府大山崎町)や明智光秀との関わりが推定される周山城跡(京都府京都市)など、織豊政権の比較的初期の城郭でもみられるが、文禄・慶長の役で朝鮮半島南部に築かれた倭城において、大規模に山上と山麓を結ぶ堅石垣が出現する(文15)。このような倭城の事例が報告されると、それまで個別に把握されていた洲本城跡(兵庫県洲本市・文14)や彦根城跡(滋賀県彦根市・文01・02・06)、伊予松山城跡(愛媛県松山市・文06・13)、村上城跡(新潟県村上市)など役後から大坂の陣までに築かれた平山城の堅石垣についても、一連の系譜の中で積極的に位置付けられるようになった。



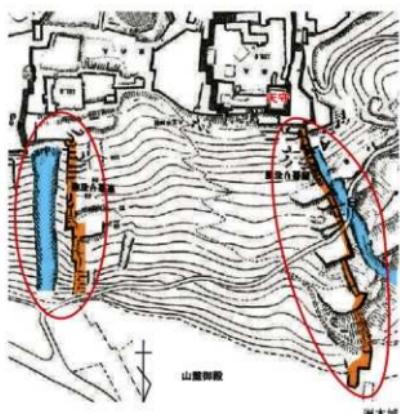
姫路城

- 姫路城  
『姫路侍屋敷図』より

- 洲本城  
本田昇氏作図に一部注記追加

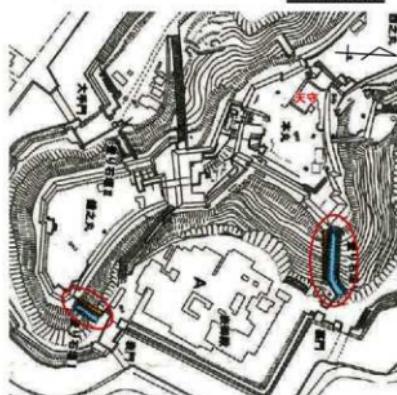
- 彦根城  
高田徹氏作図に一部注記追加

※洲本城と彦根城は文06より引用



山麓御殿

洲本城



彦根城



a. 洲本城 東側堅石垣



b. 彦根城 表御殿南側の堅石垣

図15 堅石垣（登り石垣）・堅堀比較図

近世城郭では一般に堅堀は使用しないが、倭城では堅石垣に沿って外側に大規模な堅堀を設けていた。倭城と比較すると小規模ながら、洲本城跡や彦根城跡でも同様の堅堀が確認されている(図15)。同じように元ヶ原合戦後に大坂城包囲の一環として改修を受けた姫路城跡においても堅堀が確認されたことは、近世初頭の平山城において堅堀が重要な構成要素の一つであったことを示す。伊予松山城跡南側の堅石垣についても、接する現在の登山道の間にみられるくぼみが堅堀の痕跡であった可能性もある。

彦根城跡は山麓全域を内堀で囲むが、さらにその中を大手側と佐和口側の表門からの登城ルートに分けて堅石垣・堅堀により区画する。それらは相互に離れているため、堅石垣・堅堀の内外は明確となる。洲本城跡でも山麓の居館の両端から山城を結ぶため、やはり堅石垣が守備すべき内外が明確である。これに対し、姫路城跡の堅堀は大手側と搦手側が接する個所に設けられたため、堀の両岸が相互に内側となる。北側の堅堀は搦手側を、南側の堅堀は大手側を守備する役割が想定でき、これが堅堀を二本設けた理由であろう。さらに搦手ルートについては、八頭門から姫山樹林を北腰曲輪の「ホの櫓」へと続く堅石垣(図15姫路城図内の右側赤丸)があり、これが北側からの侵入への備えとみられる。

なお、洲本城では「淡路国須本之御城絵図」(国文学研究資料館所蔵・文05)に「のぼり石垣」とともに「たてぼり」の注記があるのに対し、姫路城の絵図では堀両側の石垣から続く土塁は描かれるものの、堅堀は表記されない。彦根城においても、江戸時代後半に描かれた「文化十一年六月改正 御城内御絵図」で描かれるのは堅石垣とその上の土塁のみであること合わせると(文06)、江戸時代後半には、すでに堅堀については認識が薄れていた可能性もある。

今回の調査成果からは、近世初頭の姫路城において大手側と搦手側を分離し、片方が攻城側に占拠されても反撃のための通路や退路を確保するといった縄張り構想が存在した可能性が指摘される。

## 参考文献

- 文01 下高大輔 2017 「彦根城の「登り石垣」遺構について」『中国・四国地区城館調査検討会(愛媛大会)史料集』中国・四国地区城館調査検討会
- 文02 高田 徹 2007 「彦根城の縄張り」『近江佐和山城・彦根城』城郭談話会
- 文03 田中幸夫 1994 「姫路城瓦と姫路系瓦工人」「織豊城郭」創刊号、織豊期城郭研究会
- 文04 田中幸夫 2004 「播磨の中世瓦・瓦が語る神社・寺・城跡」私家版
- 文05 谷本 進 1995 「洲本城の構造と形態」「淡路洲本城」城郭談話会
- 文06 角田 誠 2007 「彦根城の登り石垣について」『近江佐和山城・彦根城』城郭談話会
- 文07 橋本致次 1952 「姫路城史」下巻、姫路城史刊行會(再刊1973、名著出版)
- 文08 姫路市史編集専門委員会 1988 「姫路市史」第十四巻、姫路市
- 文09 姫路市埋蔵文化財センター 2019 「姫路城城下町跡 - 第394次発掘調査報告書」姫路市教育委員会
- 文10 姫路市立城郭研究室 1993 「特別史跡姫路城跡埋門石垣修理工事報告書」姫路市姫路城周辺整備本部城周辺開発課
- 文11 姫路市立城郭研究室 1997 「特別史跡姫路城跡石垣修理工事報告書(5) 内京口門」姫路市城周辺整備事務所
- 文12 姫路市立城郭研究室編 2014 「姫路城絵図集」姫路市立城郭研究室
- 文13 日和佐宣正 2017 「伊予松山城ほか」『中国・四国地区城館調査検討会(愛媛大会)史料集』中国・四国地区城館調査検討会
- 文14 本田 昇 1995 「洲本城の遺構調査から」「淡路洲本城」城郭談話会
- 文15 倭城址研究会 1979 「倭城 I 文禄慶長の役における日本軍築城遺跡」倭城址研究会

写真図版 1



1・2区調査前全景（東から）



1区調査後全景（東から）



3区調査前全景（南西から）



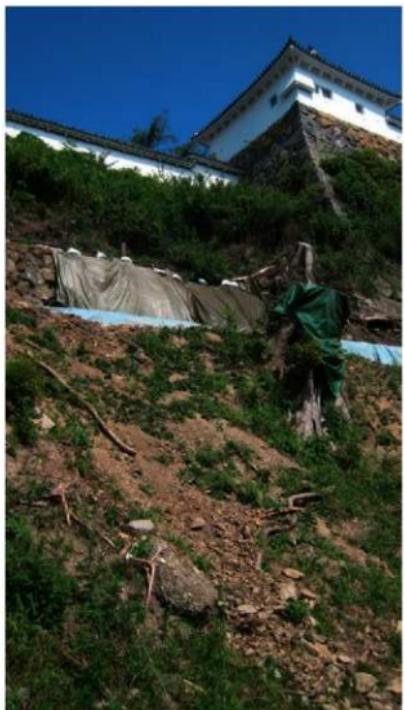
3区調査後全景（南西から）



3区調査前全景（西から）



3区調査後全景（西から）



4区調査前全景（南から）



4区調査後全景（南から）



5区調査前全景（北東から）



5区調査後全景（北東から）

## 報告書抄録

| ふりがな                       | とくべつしせきひめじょうあと   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
|----------------------------|--|-------|----------|-------------------|--------------------|-----------------------------|-------------------|----------------|
| 書名                         | 特別史跡姫路城跡   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| 副書名                        | 姫路城跡第358次発掘調査報告書   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| 卷次                         |  |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| シリーズ名                      | 姫路市埋蔵文化財センター調査報告   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| シリーズ番号                     | 第89集   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| 編著者名                       | 多田暢久   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| 編集機関                       | 姫路市埋蔵文化財センター   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| 所在地                        | 〒671-0246 兵庫県姫路市西郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| 発行年月日                      | 令和2年(2020年)3月31日   |       |          |                   |                    |                             |                   |                |
| 所収遺跡名                      | 所在地  | コード   |          | 北緯                | 東経                 | 調査期間                        | 調査面積              | 調査原因           |
|                            |  | 市町村   | 遺跡番号     |                   |                    |                             |                   |                |
| とくべつしせきひめじょうあと<br>特別史跡姫路城跡 | ひょうごけんひめじし<br>兵庫県姫路市<br>ほんまち<br>本町68   | 28201 | 020168   | 34°<br>50'<br>18" | 134°<br>41'<br>39" | 2016.6.30<br>～<br>2016.11.6 | 153m <sup>2</sup> | 通路<br>改修<br>工事 |
| 所収遺跡名                      | 種別   | 主な時代  | 主な遺構     | 主な遺物              |                    | 遺跡調査番号                      |                   |                |
| 特別史跡姫路城跡                   | 城館   | 江戸時代  | 石垣、堅堀状遺構 | 瓦・陶磁器             |                    | 20160187                    |                   |                |
| 要約                         | 現状の上山里曲輪東の城内通路は近代に丘陵斜面の削り込みと盛土で造成されており、城郭が機能した当時は、上山里曲輪の東側斜面は現状より急傾斜であった可能性が高い。また、斜面から続く堅堀状遺構の断面を確認し、これが城郭遺構の一部であった可能性が高まった。その他、城郭が存続した当時の石垣間詰石の状況を確認し、間詰石は円礫を主として現状よりも密集して詰めていたことが確認できた |       |          |                   |                    |                             |                   |                |

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第89集

**特別史跡姫路城跡**  
 ─姫路城跡第358次発掘調査報告書─  
 令和2年(2020年)3月31日発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター  
 〒671-0246 兵庫県姫路市西郷町坂元414番地1  
 TEL (079) 252-3950

発行 姫路市教育委員会  
 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 内海印刷株式会社  
 〒670-0808 兵庫県姫路市白国五丁目8-4

